

# 第6講座 古文

1 次の古文と現代語訳を読んで、あとの問いに答えなさい。

むかし、<sup>①</sup>をとこ、<sup>②</sup>いとうるはしき友ありけり。片時さらず<sup>③</sup>あひ思ひけるを、人の国へ行きけるを、いとあはれと思ひて、<sup>A</sup>別れにけり。<sup>B</sup>月日経ておこせたる文に、あさましく対面せで月日の経にけること。<sup>④</sup>忘れやし給にけん<sup>なま</sup>と、いたく思ひわびてなむ侍。<sup>よのなか</sup>世中の人の心は、目かるれば忘れぬべき物にこそあめれといへり<sup>C</sup>ければ、よみて<sup>D</sup>やる。

目かるとも思ほえなくに忘らるる時しなれば<sup>おもかけ</sup>面影にたつ

(『伊勢物語』より四十六段)

(現代語訳)

昔、ある男に、とても仲むつまじい友人がいた。しばらくの間も離れることなく思いを交わし合っていたが、地方へ行ったのを、とても悲しく思っ、別れたのだった。月日が経ってから送ってきた手紙に、驚くほどお会いしないで月日が経ってしまったことです。お忘れになったのではないかと、とても悲しい思いをしています。世の中の人の心は、離れていて会わないでいると必ずと言っていいほど忘れてしまうもののようにですと言ったので、歌をよんで送る。

会わないで離れているとも思われないことですよ。忘れる時なんてないので、いつでもあなたのお顔が幻として私の目の前にあります。

み方を、現代かなづかいのひらがなで書きなさい。

① \_\_\_\_\_  
② \_\_\_\_\_  
③ \_\_\_\_\_

問三 — 線④「おこせたる文」の内容が書かれているのは、どこからどこまでですか。古文中から初めと終わりの四字を書き抜きなさい。


問四 — 線⑤「忘れやし給にけん」について、次の(1)・(2)の問いに答えなさい。

(1) 何をお忘れになったのではないかと言っているのですか。

\_\_\_\_\_

(2) なぜお忘れになったのではないかと思うのですか。

\_\_\_\_\_

問一 — 線A～Dのうち、他と動作主の異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

\_\_\_\_\_

問二 — 線①「をとこ」、②「うるはしき」、③「あひ思ひける」の読

問五 「目かるとも……」の歌に込められた気持ちとして最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ア 忘れてしまうほどの月日は経っていない。
- イ 別れ別れになっても、心は離れていない。

ウ さびしいときには、いつでも会いに来ればよい。  
 エ お互いに忘れないでいれば、また会える日が来る。

[ ]

2 次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

\*1① 無益の<sup>むやく</sup>ことをなして時を移すを、愚<sup>おろ</sup>かなる人とも、僻事<sup>へきごと</sup>する人ともいふべし。国のため、君のため、やむことをえずしてなすべきこと多し。其<sup>その</sup>余りの暇<sup>いさま</sup>、いくばくならず。思<sup>おも</sup>べし、人<sup>ひと</sup>の身にやむことをえずして営<sup>えい</sup>む所、第一に食<sup>た</sup>ひ物、第二に着<sup>き</sup>る物、第三に居<sup>い</sup>る所なり。人間の大事、この三<sup>みつ</sup>には過ぎず、飢<sup>う</sup>ゑ、寒<sup>さむ</sup>からず、雨<sup>あめ</sup>風に侵<sup>をか</sup>されずして閑<sup>しづ</sup>かに過<sup>すご</sup>ぐすを<sup>を</sup>樂<sup>たの</sup>しみとす。

但<sup>ただ</sup>、人<sup>みな</sup>皆<sup>みな</sup>病<sup>びょう</sup>あり。病<sup>びょう</sup>に侵<sup>をか</sup>されぬれば、その愁<sup>うれ</sup>へ、忍<sup>しの</sup>びがたし。医<sup>い</sup>療<sup>りょう</sup>を忘<sup>わす</sup>るべからず。薬<sup>くすり</sup>を加<sup>くわ</sup>へて、四<sup>よつ</sup>のこと、求<sup>もと</sup>めえざるを貧<sup>まづ</sup>しとす。此<sup>この</sup>四<sup>よつ</sup>欠<sup>か</sup>けざるを富<sup>とみ</sup>めりとす。此<sup>この</sup>四<sup>よつ</sup>の他<sup>ほか</sup>を求<sup>もと</sup>め営<sup>えい</sup>むを奢<sup>おご</sup>りとす。四<sup>よつ</sup>のこと儉<sup>けん</sup>約<sup>やく</sup>なら<sup>ら</sup>ば、誰<sup>たれ</sup>人<sup>ひと</sup>か足<sup>た</sup>らずとせん。

(吉田兼好『徒然草』より第二百二十三段)

- \*1 無益のこと⇨無駄なこと。
- \*2 僻事する人⇨間違つたことをする人。
- \*3 いくばくならず⇨どれほどもない。
- \*4 人の身に⇨人間の身として生きていくために。
- \*5 営む所⇨得ようと努めることは。
- \*6 忍びがたし⇨たえがたい。
- \*7 儉約ならば⇨つつましかかな有り様ながら足りているならば。


問二 線②「この三」の内容を意味する三字熟語を書きなさい。

[ ]

問三 線③「四のこと」を、それぞれ古文中から書き抜きなさい。

[ ] [ ] [ ] [ ] [ ] [ ] [ ] [ ] [ ] [ ]

問四 線④「誰人か足らずとせん」の意味として最も適当なものを

- ア 誰<sup>だれ</sup>もが足りないところをするだろう。
- イ 誰<sup>だれ</sup>にも足りないとは言えない。
- ウ 誰<sup>だれ</sup>が足りないとするだろうか。
- エ 誰<sup>だれ</sup>かが足りないようにしたのである。

[ ]

問五 この文章で述べられた筆者の考えと合うものを次のうちから一つ

- ア 人間としてできるだけ多くのことを得ようと努力したいものだ。
- イ 四つのことしか手に入らない生活は、貧しいと言ってよい。
- ウ 病に侵されないようにすることで儉約ができる。
- エ 生きていく上で、四つのことが必要でかつ十分である。

問一 線①「無益のこと」と対照的な内容の言葉を古文中から十五字で書き抜きなさい。

[ ]

練習問題

1 次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

うらやましげなる物 経などならふとて、いみじうたどしく、われがちに、返返おなじ所をよむに、法師はことほり、男も女も、くるくと、やすらかによみたるこそ、あれがやうにいつの世にあらん、とおほゆれ。心ちなどわづらひてふしたるに、笑うち笑ひものなどいひ、

思事なげにてあゆみありく人みるこそ、いみじう

5

稲荷に思おこしてまうでたるに、中の御社のほどの、わりなうくるしきを念じのぼるに、いささかくるしげもなく、おくれて来と見るものども、ただいき先にたちてまうづる、いとめでたし。二月の午の日の

10

なりにけり。やうやうあつくさへなりて、まことにわびしくて、など、かからでよき日もあらんものを、なにしまうでつらむ、とまで涙もおちてやすみ困ずるに、四十よばかりなる女の、壺装束などにはあらで、ただひきはこえたるが、「まろは七度まうでし侍ぞ。三度はまうでぬ。いま四度は事にもあらず。まだ未に下向しぬべし」と、道にあひたる人

15

うちひて、くだりいきしこそ、ただなる所には目にもとまるまじきに、これが身にたたいまならばや、とおほえしか。  
 女児も男児も法師も、よき子ども持たる人、いみじううらやまし。髪いとながく、うるはしく、下りばなどめでたき人。又、やむごとなき人の、よろづの人にかしこまられ、かしづかれ給、見るもいとうらやまし。手よくかき、歌よくよみて、ものををりごとにも、まづとり出でらるる、うらやまし。

20

\*1 返返〓くり返しくり返し。

(清少納言『枕草子』より第百五十一段)

\*2 法師はことほり〓法師は当然のこととして。

\*3 くるくると〓舌のよく回る様子。 \*4 やすらかに〓簡単に。

\*5 あれがやうにいつの世にあらん〓あの人のように、いつの世になつたらなれるのか。

\*6 笑うち笑ひ〓快さそうに笑い。

\*7 稲荷〓京都伏見にある稲荷大社。

\*8 中の御社〓上中下の三つあるうちの、中の社。山の中にあつた。

\*9 わりなうくるしきを〓耐えがたく苦しいのを。

\*10 念じのぼるに〓我慢して登るのに。

\*11 ただいきに〓わき目もふらず、どンドン。

\*12 なからばかり〓半分ほど。 \*13 巳の時〓午前十時ころ。

\*14 など〓どうして。

\*15 やすみ困ずるに〓休息し疲れ切っていると。

\*16 壺装束などにはあらで、ただひきはこえたるが〓外出姿でなく、ただ裾をからげただけなのが。

\*17 未に下向しぬべし〓未の刻(午後二時)に帰途につけるでしょう。

\*18 ただなる所には〓普通の場所だと。

\*19 下りば〓垂れ下がった額髪。

\*20 ものををりごとにも〓何か事があると、その都度。

問一 〓線A「いみじう」、B「わづらひて」、C「まうでたるに」の

読み方を現代かなづかいのひらがなで書きなさい。

A

B

C

問二 線 a ~ d の「の」のうち、一つだけ他と意味・用法の異なるものがあります。それを記号で答えなさい。

\_\_\_\_\_

問三 線③「めでたし」、④「やうやう」、⑧「やむことなき人」の意味として最も適当なものをそれぞれ次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ③ めでたし
  - ア すばらしい
  - イ めったにない
  - ウ 驚きあきれる
  - エ くやしい

- ④ やうやう
  - ア やつと
  - イ しばしば
  - ウ ほどほどに
  - エ だんだん

- ⑧ やむことなき人
  - ア 賢い人
  - イ 高貴な人
  - ウ つまらない人
  - エ 勢いのある人

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

問四 線①「あれがやうに」とは、どんな様子を指していますか。

古文中から十五字以内で書き抜きなさい。


問五 線②「こそ」に注意して、\_\_\_\_\_にあてはまる言葉とし

て最も適当なものを次のうちから選び、記号で答えなさい。

- ア うらやまし
- イ うらやましけれ
- ウ うらやましかり
- エ うらやましく

問六 線⑤「かからでよき日もあらんものを」とは、「このようなく、よい日もあるだろうに」という意味ですが、「このようでなく」とは、どのようでなくということですか。

\_\_\_\_\_

問七 線⑥「四十よばかりなる女」について述べたものとして最も

- ア これまで七度参拝にきたうち、三度は参拝せず、残り四度もご利益はなかった。
- イ これまで七度参拝しようとしたが、三度は参拝できたものの、四度はできなかった。
- ウ 今日七度参拝する予定で、すでに三度参拝し、あと四度も問題なくできそうである。
- エ 今日七度参拝しようと思ってきたが、三度だけ参拝して、あとは参拝せず帰るつもりである。

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

問八 線⑦「これが身にただいまならばや」とは、「この女の身に直

ちになり代わりたいたいものだ」という意味ですが、こう思ったのはこのとき筆者がどんな状態にあったからですか。

\_\_\_\_\_